学 位 論 文 要 旨

氏 名 村田 透

題 目 「造形遊び」における子どもの学びの生成に関する研究

1 研究の目的と方法

本研究の目的は、「つくる過程（つくり，つくりかえ，つくる）」そのものを楽しむ特徴がある図画工作科「造形遊び」における子どもの学びの生成を明らかとすることである。つまり「造形遊び」の場において子どもが身の回りの世界（もの，こと，人）と相互作用・相互行為をして，何事かをイメージしたり，発想や構想を繰り返したり，造形物や造形行為をつくったりしながら，自らの見方，感じ方，考え方，表し方をつくり出すという学びをし，自らの学びについて省察して評価し，さらに新たな学びをつくり出すという，学びの生成（つくり，つくりかえ，つくる）を明らかにすることである。

本研究の目的を明らかにするため，学際的な諸理論（身体論，記号論，言語論，発達論，自己・他者論，構成主義の学習理論など）を援用して理論構築をするとともに，小学生や幼児を対象とした「造形遊び」の実践事例について相互行為分析やエピソード記述やエスノメソドロジーなどの現象学的アプローチを用いて質的分析を行う。

2 研究の概要

第1章では，本研究に関する問題の所在，研究の目的，方法，研究の構成及び意義を示した。産業革命による農業社会から産業社会への転換，さらに産業社会から知識基盤社会への転換という世界的な動きの中で，近代から現代にかけての日本の教育改革は，知識の詰込みという「記憶中心」の教育から，学力の三要素（基礎的基本的な知識・技能の習得，これらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等，主体的に学習に特組む態度）を一体的に育む「生きる力」の実現を目指している。学校教育への「造形遊び」の導入は，この教育改革と連動しており，図画工作科において「生きる力」を育む学びを実現する上で重要である。ただし，学校現場では教員の多忙化・多忙感を背景として「造形遊び」の実践が停滞している。くわえて図画工作科の学習活動は，依然として大人の論理（明確な指導法を求めることや作品主義の風土など）が強い傾向にあり，そのことが画一・一斉指導の授業に繋がる。このような現状における図画工作科の学習活動では，子どもの主体性や

創造性が発揮されないばかりか、自己疎外・自己喪失に繋がる懸念がある。ゆえに、創造性豊かな人間形成の場としての図画工作科の学びを保障するために、本研究では遊びがもつ教育的意義と創造的な性格に着目した「造形遊び」の場において、子どもが自分の見方、感じ方、考え方、表し方を生成する学びの在りようを明らかにする必要性を示した。

第2章では、「造形遊び」における子どもの学びの生成に関して、基礎理論を構築するとともに学びの生成の構造を明らかにすることを目的とした。理論構築をする上で、西野範夫の「造形遊び」の学び、今村仁司の近代性の構造、木村敏の「生命論、自己論」、市川浩の「身体論（＜身＞の構造）」、井筒俊彦の「意味分節」と「意識構造モデル」、丸山圭三郎の「言語=意識=身体の重層モデル」と「＜意味＞化の円環運動」の諸理論を採り上げた。さらに、小学生や幼児を対象とした「造形遊び」の実践事例（「どこでもダンボール」、「粘土とともだち」、「ゆめのくにをつくろう」）の質的分析をした。結論として、「造形遊び」は子どもが生きる意味と自らの存在をつくりだす人間の根源的で創造的な学習活動であり、子どもはアクチュアルな＜自己＞と＜意味＞とを共起的・円環的に生成（つくり、つくりかえ、つくる）する学びをしているという基礎理論を示すとともに、そのような学びの生成の構造を図示することができた。

第3章では、「造形遊び」における子どもの学びの生成に関する大人の働きや多様な他者（教師や保育者、友達）との関係性の構造を明らかにすることと、自らの学びに関する省察と評価を明らかとすることを目的とした。そのために、浜田寿美夫の「私」の成り立ち、鯨岡峻の「＜自分の心＞の成り立ち」と大人の「育てる働き」、G・H・ミードの「社会的自我」、H・ブルーマーの「シンボリック相互作用論」、D・A・ショーンの「認識論（＜行為の中の省察＞）」、北澤晃の造形活動における「＜私＞の成り立ち」と「＜me—意味＞の相互生成」の諸理論を採り上げて理論構築をした。さらに、幼児を対象とした「造形遊び」の実践事例（「様々なものから発想をして遊ぶ」、「繋げる行為から発想をして遊ぶ」）の質的分析をした。結論として、子どもは大人の「育てる働き」（「養護の働き」と「教育の働き」）を支えとしながら多様な他者との協働的・対話的・状況的なかわりを通して、問題を設定（問題発見）し、解決することを試みてアクチュアルな＜自己＞と＜意味＞をつくりだす学びをする構造を明らかとすることができた。くわえて、このような「造形遊び」の場において、子どもは「自己充実欲求」と「繋合希求欲求」を満たしながら自らの学びについて省察し、学びの妥当性や有益性を実感・評価することを明らかとした。

第4章では、「造形遊び」における子ども一人一人の概念の形成過程に着目して、複数回にわたる「造形遊び」の事例における子どもの学びの生成の変遷を明らかにすることを目的とした。そのためL・S・ヴィゴツキーの「発達の最近接領域」や「概念（言葉の意味）」の形成、M・コールの「文化-歴史的アプローチ」、Y・エンゲストロームの「拡張的学習」の諸理論を採り上げて理論構築をした。さらに、幼児や小学生を対象とした「造形遊び」の実践事例（「石鹸クリームづくり」、「紙コップをならべて、つんで、○○○して」）の質的分析をした。結論として、複数回の「造形遊び」において子どもは身の回りの世界（もの、こと、人）と相互作用・相互行為をして過去を想起し、未来を思い描き、直面する現在がはらむ状況から問題を設定し、問題の解決を試みる。さらに子どもは多様な他者と協働的・

対話的・状況的に学びを生成しながら、自らの学びの妥当性や有効性を省察して評価し、さらに新たな学びをつくり出すという過去と現在そして未来へと繋がる学びの生成（つくり、つくりかえ、つくる）の変遷を明らかとした。そのような学びの生成を通して、子どもは「造形遊び」を社会的な生産的実践とするとともに、自身が関与する「造形遊び」という学習活動に関する概念を抽象的でシンプルなものから組織的に豊かで具体的表現をもつ論理的概念へと生成（つくり、つくりかえ、つくる）することを明らかとした。

終章では、本研究のまとめとともに、本研究に関する教育貢献と今後の展望を示した。教育貢献として、第一に「造形遊び」における子どもの学びの生成に関する理論構築するとともに、子ども一人一人の質が異なる学びの生成を明らかとしたことである。つまり本研究は、結果として作品に残るとは限らない「造形遊び」という図画工作科の学習活動において、子どもが身の回りの世界（もの、こと、人）と相互作用・相互行為をして、何かをイメージしたり、発想や構想を繰り返したり、造形物や造形行為をつくったりしながら、自らの見方、感じ方、考え方、表し方をつくり出す学びの構造を明らかとした。これは子どもが材料・用具や場所および他者（教師や保育者、友達）とのかかわりを通して意味や価値や自らの存在をつくり出す学びの構造を明らかとしたことであり、資質や能力を一体的に働かせた「生きる力」を育む図画工作科・美術科の学習活動を示したことに繋がる。

第二に、幼児期の教育と小学校との円滑な接続が求められるなかで、本研究が明らかとした「造形遊び」における子ども（幼児と小学生）の学びの生成は、題材の設定や大人（教師や保育者）の働きかけ、および多様性・多義性がある子どもの学びを理解する意味において重要である。

第三に、共同研究（村田を含めた大学教員、小学校や保育の場の現職教員、学部生や大学院生など）としての本研究のアプローチ（題材開発・実践・観察・分析・考察）は、図画工作科・美術科における子どもの学びを明らかとする教育実践研究の具体的なあり方を示した。くわえて学校教育現場で停滞している「造形遊び」を持続可能な学習活動として示した。

ただし、「造形遊び」における子ども一人一人の学びは、異なる条件（題材内容、授業者、対象児、材料・用具、実施時期や場所など）で多様な展開をする。今後の展望として、本研究で得られた成果をいかしつつ、共同研究（大学教員、教職員、学部生や大学院生など）を継続し、創造性豊かな人間形成の場としての図画工作科・美術科の学びを保障するための「造形遊び」に関する理論構築と実践を進める必要があることを示した。